

スペシャルイベント 〓仁義なき初詣〓 朗読劇シナリオ

■前半シナリオ

●共通ルート

〈I & S 事務所 シュウの部屋〉

キサラ「シュウくん、新年、あけましておめでとう」

シュウ「ああ、おめでとうキサラ」

キサラ「去年は色々あったけど、改めて、今年もよろしくお願いします」

シュウ「そうだな……去年は本当に色々あったよな」

キサラ「ずっと追ってきた、シュウくんのご両親の仇も討つことができたし」

シュウ「けど、そのために、大切な人たちも沢山なくした……」

キサラ「それでも、シュウくんが一番大事な家族だけは、取り戻すことができた」

シュウ「だとしても、そのために、一番大事な人の記憶を奪ってしまった……」

〈キサラ、感激した様子で〉

キサラ「シュウくん……っ」

シュウ「……ごめん、なんか新年の挨拶だったのに辛気臭いな」

キサラ「いいんだよ……だって、あたしは後悔してない。

ううん、記憶を失う前のあたしも、きっと後悔してないから」

シュウ「キサラ……」

〈キサラ、照れながら〉

キサラ「そ、そうだ！ そろそろご飯にしようよ！ あたし、おせち料理作ったんだ！」

シュウ「おせち料理って……確か、日本の正月料理？」

キサラ「そう、シュウくんのルーツって日本でしょ？」

だからネットで色々調べて再現してみたの！」

シュウ「へー、楽しみだな！ どれどれ……」

キサラ「えっとー、一段目のお重には、豆もやしの黒豆と、

もやしのなますと、もやしの煮しめとー」

シュウ「待って待って待って！」

キサラ「それからもやしの栗きんとん……って、どうしたのシュウくん？」

シュウ「どうしたのって聞く前に、最後の奴もやしと栗のどっちなんだよ」

キサラ「ええと、お買い物メモには色んな食材が書いてあったんだけど、

お財布の中身を見た瞬間、何故か買い物かごには大量のもやしが……」

シュウ「……お前本当に記憶失ったのか？」

キサラ「ま、まあまあ！ 材料はともかく、愛情はたっぷり込めてあるから！」

シュウ「あーはい、そうですねー楽しみですねー後でいただきますねー」

キサラ「そんなこと言わずにー、はい、あーん！」

シュウ「あ、そーいえば正月だし、テレビでなんか面白い特番やってないかなー！」

〈テレビの音声〉

キサラ「もう……っ」

シュウ「あれ？　なんだよ？　どこのチャンネルも臨時ニュースばかりだな」

キサラ「何か事件でもあったのかな？」

ビル「倒壊とか、大規模停電とか、空港の火事とか……」

シュウ「それ全部俺たちが関係してたけどね……」

キサラ「ええと、なにに？」

つい先程、高層ビルが爆発して大規模火災が発生。周辺地区で停電……」

シュウ「全部乗せじゃねえか！」

キサラ「出火元はセントラルのベイロンシティ市庁舎ビル……市庁舎？」

シュウ「えっと、それって……」

〈爆発音〉

キサラ「なお爆発はオールタウン地区に向けて断続的に続いており、

付近の住民は最大限の警戒を……」

〈爆発音（さらに大きく）〉

シュウ「あゝ、あゝ、あゝ……」

〈ドアをけ破る音〉

カンナ「あっけまして、おつめでと〜！　お兄ちゃああ〜ん！」

シュウ「そうだよねそれしかないよね〜！」

キサラ「カンナ！　また脱走してきたの！？」

カンナ「違うよ？　ちゃんと行き先も教えといたし、

明日には帰るって言ってきたから、単なる外出」

〈パトカーの音〉

シュウ「どうやら警察はそう思っていないな……」

キサラ「もう、どうしていつもいつも力で解決しようとするかなあ……」

シュウくんが後でどれだけ困るかわかってる？」

カナナ「そんなこと言ったって、お正月は家族と一緒に過ごすのは当たり前じゃん」

シュウ「え……？」

カナナ「昔、お父さん、どれだけ悪魔退治で忙しくても、

お正月だけはわたしたちのために家にいてくれた……」

シュウ「カ、カナナ……」

カナナ「お兄ちゃんだって覚えてるよね？ 楽しかったよね、あの頃のお正月……」

シュウ「ああ！ よく帰ってきてくれたなカナナ！ 今日はずっくりしていけ！」

キサラ「シュウくんの弱点正確に把握し過ぎでしょこの妹……」

カナナ「という訳でキサラ、はい！」

キサラ「なにこの手？」

カナナ「えー！ お正月って言ったら落とし玉でしょー！

それが楽しみで脱走してきたんだからー」

キサラ「そんなお金があったらここに並んでるのは普通のおせちだよ……」

カナナ「えーちよっとくらいいいじゃん、10ドルでもいいからさー」

キサラ「その10ドルもらうために何億ドルの被害出したのあんた……？」

シュウ「まあまあ……カナナ、お年玉ならお兄ちゃんがあげよう！ ほら！」

カナナ「うっわあああー100ドルもー！ お兄ちゃん大好きー！」

シユウ「あはははは、大切に使うんだぞ〜？」

〈キサラヤンデレっぽく〉

キサラ「……シユウくんなんでそんな大金持ってるの？」

シユウ「えっ？」

キサラ「あたし毎日シユウくんのお財布チェックしてるけど、

昨日は3ドル25セントしか入ってなかったよね……？」

シユウ「そ、そっかな〜？ どうだったかな〜？」

カンナ「どちらかといえば彼氏の財布毎日チェックしてる女の方が衝撃なんだけど……」

キサラ「最近お仕事もしてないし、一体どうしたのかな〜？ そのお金〜……」

シユウ「え、えっと……それは、それはね〜……」

〈ドアをけ破る音〉

アヤノ「それは！ 昨日の夜！ 私が別れ際に渡したお金よ！」

シユウ「火に油を注ぐ人きたああああ〜！」

カンナ「あ〜また面倒くさい奴が……何しに来たのよアヤノ」

アヤノ「決まってるでしょ！ あなたが市庁舎から脱走したから連れ戻しに来たのよ！」

シユウ「だったら最初の台詞言わなくてもよかったんじゃないかな〜」

〈キサラヤンデレ早口で〉

キサラ「そういえばシユウくん昨日帰ってきたのずいぶんと遅かったよね。

一緒に紅白見ようと思ってずっと待ってたのに……」

シュウ「いやキサラさんちょっと落ち着こう！」

カンナ「ていうかベイロンシテイって紅白やってるんだ……」

アヤノ「ほら、そんな冷静なツツコミしてないで、さっさと帰るわよカンナ」

カンナ「え〜嫌だよ！ お正月くらい、家族と過ごさせてくれないじゃない！」

アヤノ「あなたが家族と一緒に過ごそうとしたから私の家族はみんな正月から仕事よ！」

キサラ「え、嘘、またアヤノに先越されたの……？」

シュウくんと一緒に年越しそば食べて、

一緒にカウントダウンして、一緒に初日の出を拝んでたっていうの……？」

〈ドアをけ破る音〉

シャロン「なるほど、つまり除夜の鐘が108回突かれる頃、

アヤノも108回激しく突かれていたと……」

シュウ「色々突っ込みたいけど突っ込むって言うと

また突っ込まれるから突っ込まないよ！」

カンナ「みんな日本文化に詳しく過ぎじゃない？ ここベイロンシテイだよ？」

シャロン「久しぶりだなアヤノ……相変わらず見事な抜け駆けっぷりだ」

アヤノ「シャロン！ あなたシテイから出てったはずでしょ？

なんで戻ってきてるのよ!？」

シャロン「単なるイベント朗読劇で細かい設定気にするのは無粋だろうアヤノ？」

キサラ「夢だったのに……」

大好きな人と一緒に、新しい年を迎えるの、ずっと楽しみにしてたのに……っ」

シャロン「ちなみに夢といえばだな、

日本では正月に見ると縁起がいい夢として『一富士二鷹姫初め』というのが……」

シュウ「最初から随分と飛ばしますねえシャロンさん！」

アヤノ「まあいいわ、せっかくここに居合わせたんだからあなたも協力しなさいシャロン…

二人で悪魔を取り押さえるわよ？」

シャロン「それはいいが、どっちを取り押さえるつもりだ？」

アヤノ「それはもちろん……」

〈カンナとキサラ、同時に〉

カンナ「なんかさつきから下ネタ多すぎない？

みんなわたしが未成年ってこと忘れてるよね？」

キサラ「泥棒猫、泥棒猫、泥棒猫……っ、死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね……っ」

〈少し間を開けて〉

アヤノ「……キサラに決まってるじゃない！」

シャロン「お前今保身に走っただろ？」

アヤノ「だってほら！ 今どっちが危険かなんて一目瞭然でしょ！」

シャロン「明らかにお前のせいとしか言いようがないんだが……」

キサラ「へ〜二人ともあたしと戦おうっていうんだ……」

今のあたし機嫌が悪いから手加減できないかもしれないよ？」

シャロン「だが、まあいい……あの時のリベンジマッチというのも一興だ」

アヤノ「全力で行きなさいよシャロン……少しでも気を抜いたら一気にやられるわよ？」

キサラ「笑わせるよね、たった二人の人間があたしを取り押さえようなんて……」

〈キサラ、アヤノ、シャロンが睨み合う感じの中、退屈そうなカンナ〉

カンナ「あくあ、また始まっちゃった……懲りないなあ」

シュウ「みんな心の底では、お前には言われたくないって思ってるぞ多分」

カンナ「それはお兄ちゃんも同じでしょ？」

シュウ「はい懲りない兄でごめんなさい……」

カンナ「あはは、しょうがないなあ……」

じゃ、お兄ちゃん、罪滅ぼしとして、妹孝行しなさい？」

シュウ「妹孝行って……何すればいいんだ？」

カンナ「簡単なことだよ、こんなゴタゴタほっといて、二人だけで初詣に行こ？」

〈三人同時に〉

キサラ「え？」

アヤノ「え？」

シャロン「え？」

シュウ「初詣かあ……そういえば、子供の頃行ったきりだなあ」

カンナ「それどころじゃなかったもんね、わたしたち」

シュウ「カンナ……」

アヤノ「いやいやいやちょっと待ってちょっと待ってちょっと待って！」

キサラ「何しれっと抜け駆けしようとしてるかなあ！

そもそもカンナが持ち込んだトラブルで荒れてるんだけどあたしたち！」

シャロン「だいたいベイロンシティに神社があるのか？

初詣なんて文化があるのかこの街に！」

カンナ「さつき『イベント朗読劇で細かい設定気にするのは無粋だ』って言ったの誰？」



シャロン「あゝ、マジで正月ネタ縛りうざってえ！」

シュウ「いやそれ誰の愚痴？」

キサラ「カンナ……あたし今まで、あなたのこと甘やかしてた。

脱走とか、街の破壊とかも子供のすることだからって大目に見てた……」

シャロン「それ大目に見たらいけないやつでは……」

キサラ「でも、これ以上シュウくんを独占しようとするのは許せない……

年越しそばも、カウントダウンも、初日の出も姫初めも奪われたあたしには、もう初詣しかないの！」

カンナ「それだいたいアヤノのせいじゃない？」

アヤノ「わかったキサラ落ち着きなさい！いがみ合ってばかりじゃ收拾つかないから、

ここは私が公平に仕切らせてもらうわ！」

シャロン「こいつマジ狡猾……」

アヤノ「いい？こんな街中であなたたちが物理で殴り合ったら

シテイが海に沈んでしまう……

ここは知力体力時の運、全てを駆使したゲームで決着をつけましょう！」

シュウ「アヤノさんそれいつの時代のネタ……」

カンナ「ふうふうくん、面白そうじゃない。わたしは全然おっけくだよ？」

キサラ「っ！？お、おっけくってことは、あたしが勝ったら、シュウくんとの初詣は……」

カンナ「いいよお譲ってあげる。

わたしは退屈が紛れれば、お兄ちゃんと二人きりとか結構どうでもいいし〜」

シュウ「いや今のお兄ちゃんちょっと傷ついた……」

キサラ「シュウさんと初詣シュウさんと初詣シュウさんと初詣…

…っ、ふ、ふふふ、ふふふふふっ」

アヤノ「どうやら話はまとまったようね…」

じゃ、今からゲームの進行について説明をするわ。みんな準備はいい？」

カンナ「どくと来い！」

キサラ「シュウさんと初詣…っ！」

シャロン「ふっ、星天教会の本当の力、見せてやろう…」

〈シャロン以外の三人、『は？』みたいな感じで沈黙〉

アヤノ「…なんであなたまで参戦するのよシャロン？」

カンナ「今ってキサラとわたしの戦いじゃなかったっけ？」

キサラ「シャロン…あなたやっぱり、まだシュウくんのこと…っ」

シャロン「勘違いするな…」

私は最初からそのクズ男のことは、悪魔退治の道具程度にしか思っていない」

シュウ「なんか今日へこむことばかりだな」

シャロン「だが、この星天教会リビングレリック第八位、純潔のシャロン！

勝負を挑まれて黙っていられるほど腑抜けではない！」

カンナ「誰もあなたに勝負なんか挑んでないっての」

キサラ「ほんとコイツマジうざい」

アヤノ「それはそうと、いい加減その純潔っての見直さないよ」

シャロン「ふっ、そういう訳だアヤノ。」

私もそのゲームの参加者としてエントリーするがいい……  
何しろ腑抜けではないからな〜！」

アヤノ「はあ、わかったわ……キサラもカンナも異存はない？」

キサラ「なんでもいいよ全員ぶっ殺すから」

カンナ「どうせ人間なんて敵じゃないし〜」

アヤノ「じゃ、改めて、ゲームの進行について説明するわよ？」

みんなには今から、●個のゲームに挑戦してもらう」

アヤノ「そして、ゲームに参加する四人の中から、

獲得した合計点が一番高い人が、シュウとの二人きりの初詣に……」

キサラ「あれ？ 四人……？」

カンナ「計算合わなくない……？」

シャロン「アヤノ、お前まさか……」

アヤノ「司会進行はベイロンシティ名誉市民、向清太郎さん、

そして審査は緒方シュウさんをお願いします。

それでは私含めた参加者の皆さん、頑張ってくださいませよう〜！」

キサラ「こおおおの超絶抜け駆け女あああああ〜！」

(前半完)

■後半シナリオ

●キサラルート

〈神社〉

シュウ「キサラク、そろそろ時間だから戻るぞ？」

キサラ「う〜」

シュウ「おいキサラ、キサラさ〜ん？」

キサラ「うううう〜」

シュウ「まだ拗ねてんの？」

せっかく一緒に初詣に来たのに、ほとんど話さなかったじゃないか」

キサラ「だって、だって、だってえ……」

年越しそばに、カウントダウンに、初日の出にい……」

シュウ「来年は一緒にやるから！ だからいい加減怒るのやめよう？」

キサラ「別に怒ってる訳じゃないよ……」

ただ、悲しいなあって、死にたいなあって、

メンヘラさんと繋がりたいな〜って……」

シュウ「怒ってくれた方がマシですむしろ怒ってくださいお願いします！」

キサラ「でも、そうなってしまうのは、仕方のないことだと思ってる」

シュウ「え……？」

キサラ「わかってるんだ……あたしは、皆に比べて周回遅れなんだって」

シュウ「周回遅れ……？」

キサラ「だってあたしには、あなたと過ごした、去年までの三年間の記憶がない。

みんなが知っている、当たり前あなたを知らない」

シュウ「だからそれは、俺がゆっくり話して聞かせて……」

キサラ「ううん、結局どれだけ話してくれても、それはただの物語」

シュウ「物語って……でもそれは本当にあったことで……」

キサラ「でもあたしには、その瞬間のあなたの声がない。匂いがない。景色がない」

キサラ「わかるかなシュウくん？ 情報と情景は、違うんだよ……」

〈シュウ、少し寂しそうに〉

シュウ「そういうもの、なのかな……？」

シュウ「全てを取り戻してしまった俺には、逆にその感覚は思い出せないな」

キサラ「お互いの状況、交換しちゃったもんね……ままならない、ものだね」

シュウ「キサラ……」

キサラ「ごめんね？ やっぱり怒った方がよかったね？ キレちゃった方が楽だったね？」

〈キサラ、無理に明るく〉

キサラ「さ、戻ろう？ カンナやみんなが待って……」

シュウ「でもさキサラ……やっぱり俺たちには、お互いしかないよ」

キサラ「え？」

シュウ「だってそうだろ？」

お前の感じてる、その『ままならない』って思いを共有できるのは、俺とお前だけだ」

キサラ 『『ままならない』を、共有できる……』」

シュウ 「記憶を奪って、与えて、騙して、騙されて。

けれどそれは、なんていうか、相手を陥れるためじゃなくて……」

キサラ 「相手を愛すればこそ、ってこと？」

シュウ 「そういうこと言い切っちゃうところは変わらないな、キサラ……」

〈キサラ、自然に明るく〉

キサラ 「まあ、いくら記憶をなくしても、人間の本质って変わらないからね」

シュウ 「人間じゃなくて悪魔だけだな」

キサラ 「結局同じ性格になって、同じように出会った、

同じ人を好きになっちゃうんだよね……」

シュウ 「可哀想になぁ……最悪の人間に拾われたばかりに」

キサラ 「問題なのは、その可哀想な悪魔が、

ちっとも自分を可哀想だと思っていないところだと思うんだよね」

シュウ 「……今度こそ行くぞ？ みんなのところに」

キサラ 「そうだね、行こうシュウくん。あ、あと……」

シュウ 「わかってる。ほら、手、出して」

キサラ 「うん……」

(キサラルート完)

●アヤノルート..

〈神社〉

シュウ「ほらアヤノさん、早く行くよ？」

アヤノ「ま、待って……慣れない履物のせいで、足がちよっと……」

シュウ「だいたい、なんでわざわざ着替えてくるのさ……」

一緒にいられる時間、限られてるってのに」

アヤノ「しょうがないでしょ……こんなの着られるの、年に一度なんだから」

シュウ「ほら、肩貸すから。ちよっとずつでいいから歩こう？」

〈アヤノ、照れた感じで〉

シュウ「あ、ありがとう、シュウ……」

シュウ「だいたい約束の時間に遅れると、またみんなに抜け駆け女って言われるよ？」

〈アヤノ、甘える感じで〉

アヤノ「あ、あれは、その……そういうチャンスを与える、シュウが悪いんでしょ？」

シュウ「……そういう駆け引きの仕方こそが、

みんなに卑怯だって言われる理由なんじゃないの？」

アヤノ「だったら断んなさいよ私の誘い……」

別に、怒ったり、拗ねたり、泣いたりしないから」

シュウ「いやするでしょ全部するでしょ……」

アヤノ「は？ 何か言った!？」

シュウ「ほら怒った! いきなり誓い破ってるじゃん!」

アヤノ「い、今のは……あなたの誘導の仕方が悪いのよ……」

シュウ「それにだいたい、俺がアヤノさんの頼み断れるわけないでしょ……」

アヤノ「え……」

シュウ「だつてさ、一歳の頃から英才教育されてるんだよ？ もう条件反射みたいなもん」

アヤノ「もうちょっとロマンチックな言い訳用意しなさいよ……」

シュウ「そんな、表面取り繕って誤魔化せるようなものじゃないでしょ？

俺たちの関係ってさ……」

アヤノ「もう、20年近くになるのね……私がシュウと出会ってから」

シュウ「ほんと、20年もよく見捨てないよねアヤノさん。

こんな生活能力のないダメ男をさ」

アヤノ「20年後にキサラがあなたを見捨ててると思う？ つまりは、そういうことよ」

シュウ「怖いこと言わないでよ。想像しちゃったよ40になってもヒモの俺……」

アヤノ「ふふっ」

〈少し間を開ける〉

アヤノ「あゝあ、もう合流の時間か」

シュウ「そんなに名残惜しいかねえ……」

アヤノ「ほんとと、シュウって冷たい……」

シュウ「いや、だつて、昨夜だつてずっと一緒にいたじゃん」

アヤノ「それでもね、次に一緒にいられる保証はない……私はね、そういう立場の女なの」



シュウ「さっきも言っただろ？ 俺が、アヤノさんの頼みを断れる訳ないって」

アヤノ「それってキサラにとっては最悪よね？ 私があのコだったら絶対ブチ切れてる」

シュウ「俺になんて言って欲しいのアヤノさくん……」

アヤノ「そんなの、自分で考えなさいよ」

シュウ「じゃあアヤノさんも、自分で考えて？」

アヤノ「当たり前でしょ？ 私は自立した女なんだから」

シュウ「はいはい、という訳でこの話はおしまい。さ、みんなの所に戻るよ？」

アヤノ「う、うん……」

シュウ「どしたの？ まだ足が痛い？」

アヤノ「実はねシュウ？ 私、今度の土曜オフなんだけど……どうしたらいい？」

シュウ「だ〜か〜ら〜！ そういうところだよアヤノさくん！」

(アヤノルート完)

● シャロンルート…

〈神社〉

シャロン「ふうむ、たまには異文化に触れるというのも面白いな」

〈シュウ、急かすように〉

シュウ「終わった？ お参り終わった？ じゃ行こか。みんな待ってるし」

シャロン「…何故そんなに急いで皆のもとに戻ろうとする？

私と二人で過ごすべき時間はまだ数分残っているぞ？」

シュウ「何でって、わかんないのか？

二人きりだと、いつ刺されるかもしれないからに決まってるだろ？」

シャロン「これは妙なことを…三年前、私を串刺しにしたのはお前の方だろうか？」

シュウ「あとね！ いつそうやって下ネタをぶち込まれるか気が気じゃなかったんだよ！」

シャロン「はっはっは…安心しろ。もうお前を殺すのもハニトラにかけるのも諦めた」

シュウ「まあ、今そんなことすると、悪魔を敵に回すからな。しかも二人も」

シャロン「それもあるが、そもそも今の私はエクソシストですらないからな」

シュウ「はあ？ それってどういう…」

シャロン「星天教会を破門になった」

シュウ「え…」

シャロン「この前のアスモデウスの事件でな。

私は教会の指示に背き、独断で事態の收拾に当たった。

それが本部の逆鱗に触れたらしい」

シュウ「それってもしかして、俺が協力を頼んだから……」

シャロン「まあ、理由はいくつもあるが、それも一因だったことは間違いないだろう……  
そうだな、だいたい10割くらいはそれかな？」

シュウ「誠に申し訳ございませんっ！」

〈シャロン、からかうように〉

シャロン「申し訳なく思うか？ 償わなくてはなあく、とか思っているか？」

シュウ「そ、そりゃ……ほんのちよつとは……」

シャロン「では償え。今償え。やれ償え。誠心誠意償え」

シュウ「ほんのちよつとって言ったよね!？」

シャロン「そうだな、ではほんのちよつと、何をしてもらおうか……」

シュウ「あ、あの、言っとくけど、金は……」

シャロン「お前と金のやり取りはしない。

搾り取るつもりが、いつの間にか貢がされていたらたまらないからな」

シュウ「俺のことなんだと思って……いやすいませんその通りですね」

シャロン「そうだな……じゃあ、もう一度一戦交えるというのはどうだ？」

シュウ「ふっ……いかに教会のクレイジーエクソシストらしい要求だな」

シャロン「元、だがな」

シュウ「俺は構わないけど、さすがに命のやり取りは無しだぜ？」

シャロン「ああ、わかってる。正々堂々とやろう。

私は暗器を使わない。だからお前も毒を使うな」

シュウ「いやいや、普段銃は使うけど毒なんか使ったこと……毒？」

シャロン「使ったよなあ、三年前？ ベッドの中で激しく肉弾戦をしたとき？」

〈シュウ、焦りつつ〉

シュウ「い、いや、待て？ もしかして一戦交えるって……」

シャロン「何だ？ お前は何と勘違いしていた？」

シュウ「え？ え？ シャロン、お前……」

シャロン「……ぶっ、くくく、あははははっ」

シュウ「な、何だよ、からかうなよっ」

シャロン「いや、悪い悪い。相変わらずハーレムラブコメをやってるお前たちを見ていたら、  
ついつい弄ってやりたくなってるな」

シュウ「はあ、やっぱり刺された。だから早く戻りたいって言ったんだ」

シャロン「まあ、そろそろ時間だし、そうだな、戻るか」

シュウ「ああ、じゃあ行くぞ」

シャロン「あゝそうだ。あとこれを渡しておく」

シュウ「なんだよこのメモ？」

シャロン「私の滞在しているホテルの場所と部屋番号だ。

土曜の夜が薦めかな？ 翌朝には私もいなくなるから後腐れもないぞ？」

シュウ「二段階で引っかけてくるのやめてくんない!？」

(シャロンルート完)

●カンナルート..

〈神社〉

〈鈴を鳴らす音〉

カンナ「おっ待たせ〜お兄ちゃん！」

〈シュウ、不機嫌そうに〉

シュウ「おう……」

カンナ「面白かったよ〜！ おっきい鈴鳴らして、ばんばんって二回手、叩いて〜。

お兄ちゃんもやればよかったのに、お参り」

シュウ「いいよ俺は……」

カンナ「どしたの〜？ なんかご機嫌斜め〜」

シュウ「別に俺のことなんか気にしなくてもいいじゃん……

どうせただの退屈しのぎの相手なんだし〜」

カンナ「ん〜？ んんんんん〜？」

カンナ「やっだああ〜お兄ちゃん、さっきわたしが言ったことまだ気にしてんの〜？」

シュウ「いや別にそんなことね〜し〜？ 俺だって暇だから付き合っただけだし〜？」

カンナ「あっははは、面白い〜！ 他の女たちはみんなお兄ちゃんに夢中なのに、

お兄ちゃんはわたしに夢中なんだね〜？」

〈シュウ、寂しそうに〉

シュウ「そうだよ、そんなの当たり前だろ」

〈カンナもシュウに合わせしんみりした感じに〉

カンナ「……うん、そうだね」

シュウ「12年、12年間だぞ……」

みんなに、カンナは死んだんだって、諦めろって、ずっと言われ続けてたんだ」

カンナ「どっこい悪魔は死にません」

シュウ「ああ、そうだ……死んでなくて良かった」

〈シュウ、感極まった様子に〉

シュウ「お前が悪魔の子で、本当によかった……っ」

〈少し間を開けて〉

カンナ「……それ、シテイの人たちに言っちゃ駄目だよ？

お兄ちゃんまで悪魔災害認定されちゃう」

シュウ「うん、わかってる……わかってるって！」

〈シュウ、少しすすりアドリブ〉

カンナ「あのね、お兄ちゃん……どうしてわたしが、今日、

お兄ちゃんと二人きりじゃなくてもいいって言ったかわかる？」

シュウ「だから、お前には俺の気持ちなんか……」

カンナ「お兄ちゃんと一緒じゃなくても、キサラやアヤノと一緒に、

十分に楽しいからだよ？」

シュウ「え……」

カンナ「そりゃ、あいつらはお兄ちゃんにしつこくつきまとう鬱陶しい虫だし、

いっつも説教ばっかだし、殺してやろうと思ったこともあったけどさ」

シュウ「それはそうと、シャロンは……」

カナナ「でも、他の奴らと違ってわたしのこと邪険にしないし、

本気でわたしのこと心配してるし、

なんか、家族みたいだなんて、そんな風に思っちゃうんだよね〜」

シュウ「カナナ……」

カナナ「ま、お兄ちゃんの見次次第では、

本当に家族になっちゃうかもしれないしね〜、どっちも」

シュウ「お前の許しがないや、そうはならないよ。どっちとも」

カナナ「いやそれは信用できない。絶対信用できない」

シュウ「……ごめんなさい」

カナナ「と、さてと、それじゃみんなのところに戻ろっか！

どうせ次は誰がお兄ちゃんを独占するかで揉めてる筈だからね〜」

シュウ「……足取りが重くなるようなこと言わないで」

カナナ「あははっ、じゃ、急ぐよお兄ちゃん！」

シュウ「ああ、行こうか……カナナ」

(カナナルート完)

● 共通ルート..

〈神社からの帰り道〉

カンナ「あゝ、楽しかったねゝ、初詣！」

キサラ「あたしも楽しかった……」

なんかこういうの初めてじゃない気もしたけど、ま、気のせいだよね」

〈シュウ、小声でアヤノに〉

シュウ「ねえねえアヤノさくん、悪いんだけどまたお金貸してくれない？

昨日借りた分、お年玉とお賽銭で使い切っちゃって……」

アヤノ「ああ、今年も結局こういう関係が続くのね……」

シャロン「お前今、シュウが用件切り出す前から財布出してただろ」

カンナ「それでさ、みんなはどんなお願いした？

わたしはもちろん、お兄ちゃんの周りをうろつくうざったい害虫どもが

絶滅しますようにって！」

シャロン「……悪魔が神に祈るのがそれってのもなかなか斬新だな」

アヤノ「しかも駆除対象にうっれしそうに話すし」

カンナ「で？ その駆除対象のあんたたちのお願い事は？

冥途の土産に聞いておいてあげるよ？」

アヤノ「ま、わたしは、シテイが平和になりつつも、

A A A が経営破綻しない程度には仕事がありますように、って感じかしらね」

シュウ「……アヤノさん微妙に社長に似てきたねその考え方」

シャロン「ふっ、だから民間などに悪魔殲滅など無理だというんだ。

もちろん私の願いは、この世全ての悪魔の殲滅！」



キサラ「……今ここに二人もいる中でよく言ったね」

カンナ「今すぐわたしのお願い叶えてもいいんだよ害虫？」

シュウ「ま〜ま〜！めでたい新年なんだから今日くらいは平和で行こうよ！

ちなみに俺の願い事は平和そのもの！

どれだけ仕事をしなくても、毎日美味しいご飯が食べられますようにっ！」

キサラ「そんなのお願いなんかしなくても、

あたしがしっかり毎日三食食べさせてあげるから。ね？ シュウくん？」

アヤノ「で、もやしに飽きたら私のところ来ればいい」

シャロン「お前もう隙間狙い隠さないな……」

カンナ「で？ キサラは？」

キサラ「ん？ そうだなあ……今のあたし、昔の記憶がないから、

あんまり未来に求めることってピンとこないんだよねえ」

キサラ「知らないうちに、悪魔の自分が人間の中に溶け込んで暮らしてるし、

ある意味、今の自分の境遇は出来過ぎだとも思ってるし……

これ以上何か求めたら、いけないんじゃないかなあって……」

シュウ「キサラ、お前……」

アヤノ「そんなことない……あなたは、もっと幸せに……っ」

キサラ「でも、ま、敢えて言うならって感じで……」

〈キサラ、ここからヤンデレ系に〉

キサラ「シュウくんが毎日優しくしてくれますようにシュウくんが毎日愛をささやいてくれますように春はシュウくんとお花見に行けますように夏はシュウくんと海に行けますように秋はシュウくんとキャンプに行けますように冬はシュウくんとこたつでイチヤイチャできますようにあと今年の年末こそシュウくんと年越しそばと

カウントダウンと初日の出と姫初めを……っ」

〈他の人たち、キサラがぶつぶつ語っている途中から入る感じで〉

シャロン「……こいつやっぱり本質は何も変わってないか？」

アヤノ「ま、こうでなくちゃキサラじゃないとも言えるしね」

カンナ「こう言いつつ、自分からは行けないへタレなどころもね〜」

シュウ「いやあのね？ みんなキサラのこと分かり過ぎでしょ？」

〈四人、和やかな雰囲気の中、アヤノの携帯が鳴る〉

アヤノ「あ、ごめん電話……はい、はい……ああ、母さん？ どしたのお正月から？」

〈アヤノ、だんだん焦った感じに〉

アヤノ「え？ え……ああ！ は、はいっ！ もちろん対応中です社長！

はいっ、今まさに対象を追い込んだところでっ！」

アヤノ「はい、はい……30分以内には……わかりました」

〈アヤノ、電話を切る〉

シュウ「アヤノさん、今の……」

アヤノ「そういえば、カンナの捕獲、A A Aが正式に入札してたんだ……」

シュウ「ああ……来た時確かに仕事って言ってたね……」

シャロン「なのにターゲットと呑気に初詣とか、

お前の会社のガバナンスは一体どうなってるんだ？」

アヤノ「朗読劇に細かい設定求めないでよ！」

シュウ「そ、それはそうと、どうするのアイノさん？」

アイノ「そ、そうね……とりあえず、

カンナの抵抗が激しくて手間取ったということにして……」

〈カンナ、喧嘩を売る感じで〉

カンナ「……別にわたし、本当に手間取らせてもいいんだよ？」

キサラ「……そういうことなら、あたしカンナの味方してもいいんだけど？」

シュウ「あれ？ 実は昨夜のことまだ全然根に持ってます？」

シャロン「まあ、やるなら私は構わんぞ？

どうせ、ちゃんと仕事したというアリバイが必要だろうアイノ？」

アイノ「それもそうね……じゃあ、キサラとカンナはハンデで武器なし。

人的被害は極力避けつつ、ある程度の破壊は容認するということで……」

シュウ「さすがに朗読劇でもそういう談合はマズくない!？」

カンナ「りょうか！ それじゃこっちは肉弾戦で。全力でいっくよ！」

キサラ「カンナはシャロンをお願い。あたしはアイノを潰すから……」

アイノ「あくまでフリだからねキサラ！ 戦ってるポーズだからね？」

キサラ「じゃあなんで銃構えてんのよあんた！」

シュウ「ちょっと待ってみんなあああ！」

〈爆発音〉

(了)